

執筆によせて

沖縄県は日本で最もグラム染色が実施されている県であり、また琉球大学医学部附属病院はグラム染色を最も活用している大学病院であると自負している。このたび琉球大学大学院医学研究科 感染症・呼吸器・消化器内科学（第一内科）の田里大輔医師が執筆したグラム染色に関する書籍を出版することができた。この本は雑誌「レジデントノート」に連載された論文をまとめ、さらに加筆したものである。これだけの内容の本を1人でまとめあげた田里大輔先生の努力に敬意を表したい。また写真を提供していただいた多くの先生方にも深く感謝したい。

さてグラム染色¹⁾の名称の由来となっているHans Christian Joachim Gram（1853年～1938年）はデンマーク人医師であるが、もともと細菌学を専攻しようとしたのではなく、内科医としての経験を積むためにベルリンのFriedrichshain病院に研修留学した。その際の上司がFriedländerであった。当時、大葉性肺炎の起炎菌は、肺炎球菌（Fränkelが1884年に発見）であるのか、肺炎桿菌（Friedländerが1882年に発見、Friedländer桿菌とも呼ばれる）であるのか、という論争がなされていた。この論争は、肺炎球菌を主たる病原体としたFränkelの勝利となるものの、Friedländerは「Gramの考案した染色では球菌は染色され、桿菌は漂白されるが、共に莢膜を有していることが重要で、当方が見出した桿菌でも大葉性肺炎は惹起される」という見解を述べている²⁾。またGramの論文¹⁾の最後には、「この染色法を用いるとSchizomycetes（さまざまな病原体）の検査は遥かに容易となるが、不完全な部分があることも承知のうえで公表することとした。他の研究者によって実用性が高められることを願っている」と記載されている²⁾。

実際にグラム染色はその後さまざまな改良が加えられ、世界中で広く活用されている。本書が多くの若き医師の診療の一助になれば幸いである。

2013年5月

琉球大学大学院医学研究科 感染症・呼吸器・消化器内科学（第一内科）
藤田次郎

1) Gram, C.: Über die isolirte Färbung der Schizomyceten in Schnitt-und Trockenpreparaten. Fortschr Med, 2: 185-189, 1884
2) 紺野昌俊: Paul EhrlichとHans Christian Gram（その3）。モダンメディア, 57: 319-324, 2011